

## 教員の総合業績(基礎資料)調査 氏名 ( 伊藤(横山) 美紀 )

### 1 研究業績

1) 著書・論文・学会発表・作品など (平成 12-18 年度に限る)

例: (欧文の場合は、原文 **alphabet** で記入してください)

# 全著者あるいは作者名 (自己にアンダーライン、単著の場合はアンダーライン不要)

& 著書、学術論文又は作品の名称

\$ 発行所 (総頁数)、発表雑誌又は発表学会 (号・巻・pp・年月)、展覧会 (場所・期間) などの名称

さらに、特別講演・シンポジウム (招待講演)・一般講演など (地方支部会・全国大会・国際会議) の別

註: 学会・展覧会など、専門分野以外の人に分りにくい場合は、できるだけその社会的位置づけ、歴史、規模などの簡潔な説明を付してください

1.

# 藤肥傑, 伊藤恵, 伊藤(横山)美紀

& 開発初心者のコミュニケーション能力におけるアジャイル開発の有用性

\$ 情報処理北海道シンポジウム 2006 講演論文概要集 p.4, Oct 2006. 口頭発表.

2.

# 伊藤(横山)美紀

& ホームステイの夕食時におけるテイル形の使用について

\$ 日本語・日本文化講座夏期セミナー20周年記念シンポジウム&第4回 OPI 国際シンポジウム報告・論文集, 財団法人国際交流センター発行, pp.116-124, 2006年3月. シンポジウム報告・論文集.

3.

# Miki Yokoyama Ito, Kei Itou, Yoshiaki Mima, Sadayoshi Mikami

& Making Teaching Visible: Developing a Web-based Course Support System to Facilitate Teaching and Learning Activities

\$ Hawaii International Conference on Education (HICE), Proceedings in CD-ROM (ISSN# 1541-5880), January 2006.

4.

# 竹内寿和, 伊藤恵, 伊藤(横山) 美紀

& eXtreme Programming の検証-定量的データによる考察-

\$ 情報処理北海道シンポジウム 2005, 講演論文集, pp.14-15, 2005年10月, 口頭発表.

5.

# 深澤 典史, 伊藤(横山) 美紀, 伊藤 恵

& UML 仕様書を利用したコード生成支援

\$ 平成 17 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会, 講演論文集 CD-ROM, 講演番号 102, 口頭発表.

6.

# 高野 和也, 伊藤 (横山) 美紀, 伊藤 恵

& ソフトウェアパフォーマンス改善のためのコード記述支援ツール

\$ 平成 17 年度電気・情報関係学会北海道支部連合大会, 講演論文集 CD-ROM, 講演番号 103, 口頭発表.

7.

# 伊藤(横山)美紀

& ホームステイの夕食時におけるテイル形の使用について

\$ 日本語・日本文化講座夏期セミナー20 周年記念シンポジウム&第 4 回 OPI 国際シンポジウム予稿集, pp. 62-65, 2005 年 8 月. 口頭発表.

8.

# 伊藤(横山)美紀、澤田武泰、伊藤恵、戸田真志

& 進行形に関する誤用とインストラクションの影響についての考察-mikibbs データの分析より-

\$ 函館英文学, 第 44 号, 函館英語英文学会発行. pp.87-102. 2005 年 6 月. 査読論文.

9.

# Kei Itou, Miki Yokoyama, Masashi Toda, Makoto Ito

& A Preliminary Study on Adaptive XP Operation for Learning Developers

\$ The 8<sup>th</sup> World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics, Proceedings: vol. IV 122-127. July 2004. Oral presentation.

10.

# Yokoyama, M., Kimura, K., Toda, M., and Matsubara, C.

& Integration of On-Line and Off-Line Activities for Learning of Foreign Languages and Cultures

\$ Emerging Technologies in Teaching Languages and Cultures, vol. 4, Ed. Yoshiko Saito-Abbott, Richard Donovan, and Thomas Abbott, San Diego State University: LARC Press, 2004, pp. 117-129. 発表報告・論文集.

11.

# Weintraub, H., Yokoyama, M., Kimura, K. and Toda, M.

& Designing Engaging and Meaningful Learning Environments with New Media: combining on-line bbs experiences with multi-sensual reflective conversation;

\$ In the proceeding of World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications 2003, pp. 2255-2259, Chesapeake, VA: AACE. p. 139 for the abstract, 2003.

12.

# 横山美紀, 木村健一

& 異文化体験のためのシミュレーションゲーム「バーンガ」-情報表現への展開

\$ 日本認知科学会第20回大会発表論文集, 376-377頁, 2003年6月, ポスタ発表

13.

# Yokoyama, M., Kimura, K., Toda, M., and Matsubara, C.

& Integration of On-Line and Off-Line Activities for Learning of Foreign Languages and Cultures

\$ The 5th Annual Digital Stream: Emerging Technologies in Teaching Languages and Culture, March 2003. oral presentation.

14.

# Yokoyama, M., Kimura, K., Toda, M. and Matsubara C.

& A Preliminary Study on the Educational Design Using Multi-Media for Facilitating Cultural Awareness

\$ The Journal of English Literacy Society of Hakodate, 71-82. March 2003. 査読論文

15.

# Yokoyama, M., Kimura, K., Toda, M., Matsubara, C and Takayama, T.

& Visual Reconstruction of BBS Interaction - The Effect of Combination of On-Line Intercultural Communication and Reflective Activities in Foreign Language Learning -

\$ Proc. of Hawaii International Conference on Education (HICE 2003), ISSN# 1541-5880, January 2003, Poster presentation

16.

# Yokoyama, M.

& Optimizing Second-Language Learning in a Natural Setting: What Happens in Conversations with Japanese Host Families?

\$ 13th World Congress of Applied Linguistics: AILA 2002, 148-149, December 2002. oral presentation.

17.

# 横山美紀, 木村健一, 戸田真志, 松原知代子, 高山貴裕

& 会話活動の可視化-会話のデッサンツールのための基礎的研究

\$ 日本デザイン学会誌デザイン学研究 第49回研究発表大会概要集, 364-365, 2002年11月, 口頭発表

18.

# 横山美紀

& ウチを学べる発信型コミュニケーション活動

\$ 平成14年度函館英語英文学会年会, 2002年6月. 口頭発表

19.

# 横山美紀, 木村健一, ラリー・デイビス, 松原知代子

& 多文化理解への気づきを目指したシミュレーションゲームの考察

\$ 学校教育学会誌, 第7号, 北海道教育大学函館学校教育学会誌, 77-86, 2002年6月. 査読論文

20.

# 横山美紀

& 発信型のコミュニケーション活動についての一考察-クラス実践を通して-

\$ 函館英文学, 函館英語英文学会, 41:29-44, 2002年6月. 査読論文

21.

# 横山美紀, 木村健一, ラリー・デイビス

& 多文化体験のためのシミュレーションゲームの実践

\$ 学校教育学会誌, 第6号, 北海道教育大学函館学校教育学会誌, 81-90, 2001年6月. 査読論文

2) 学会活動(役員・会員)、学会の組織運営、学会誌の編集委員など(平成12-18年度に限る)

例:

# 学会などの名称

& 編集委員長又は委員などの別

\$ 任務期間(年月)

註: 専門分野によっては適宜変更(例えば、学会を展覧会などと記す)・追加説明を付してください

できれば展覧会・学会などについても社会的位置付け、歴史、規模などの簡潔な説明を添えてください

# 日本認知科学会全国大会

& 準備委員(受付監督担当)

\$ 2001年5月～6月

# 函館日本語教育研究会

& 役員：ウェブページ・メーリングリスト担当

\$ 2001年4月～2007年3月

# AAMAS 2006

& local organization member

\$ 2005年5月～2006年5月

# 社団法人日本語教育学会

& 北海道地区研究集会委員

\$ 2005年6月～現在

# 函館英語英文学会(1996-現在)、北海道教育大学函館学校教育学会(1996-現在)、Association of Teachers of Japanese(ATJ:1998-現在)、Association for Asian Studies (AAS:1998-2006)、American Council of Teaching of Foreign Language(ACTFL: 2000-現在)、日本語教育学会(2000-現在)、異文化コミュニケーション学会(SIETAR JAPAN: 2000-現在)、日本コミュニケーション学会(CAJ: 2001-現在)、日本認知科学会(2001-現在)、日本デザイン学会(2002-2003)、全国語学教育学会(JALT: 2002-現在)

& 学会会員

\$ 上記(#)に記載

3) 研究費獲得状況(未来大学外からの財源)(科学研究費、財団助成金、委任経理金など  
(平成12-17年度に限る)

例:

#平成12-(13)年度

&財源、たとえば科学研究費補助金

\$ 研究課題名

%代表者、分担者の別、研究課題参加者数、あるいは〇〇研究所との共同研究(相手機関の協同研究者数など)

¥研究経費(例:平成12年度;800千円、平成13年度;500千円)

# 平成 14 年度

& 北海道学術振興財団研究助成(参加経費助成)

\$ 「第 13 回国際応用言語学会世界大会参加および研究発表(シンガポール)」

% 横山美紀

¥ 100 千円

- 4) その他（特許、内地研究（学内共同研究は除外）および在外研究歴と成果など特記すべきこと。本項目は平成 12-17 年度に限定しない。）

## 2 教育業績

- 1) 教育負担の実態（複数教員で担当する科目の場合は、貴方の分担分のみ）本項目は時間割に含まれた教科（補講・補習など教室で行なったものは含む）を調査の対象としております。従って、〇〇研究会、〇〇同好会など、各教員室他で行なったものは、対象外とします。試験やレポートなどの採点時間も除外します。（平成 12-17 年度に限る）

例：

# 科目名（講義・演習・実習・補講の別）、単位数・必修/選択の別、担当教員数（単独の場合は不要）

& 実施期間（平成 12 年度前期、あるいは平成 13 年 10-11 月）、実施コマ数（休講しても補講で補えば算定する）、補講をしなかった休講回数（例：実施 13 コマ、休講 2 コマ）

\$ 実働時間数（全て、実時間合計(推定)値でお願いします）、演習などは一コマ 1.5 時間を超えていると思われるので、そのような場合は、たとえば一コマ 2.2 時間などと算定してください（例：実働 22.5 時間）

% 受講登録学生数（例：45 名）、平均的出席者数（例：38 名；初めは 40 名、終りは 25 名など）、単位認定（合格）者数

註：本項目はできるだけ正確にお願いしたいですが、概数でも結構です 記述がない場合は 0 と判断します

# コミュニケーション 各クラス見学 各クラス 3 単位・必修、担当教員各クラス 1 名

& 12 年度 7-8 月

\$ 実働約 20 時間

% 各クラス 40-42 名

# コミュニケーション 全クラスの通訳補助 各クラス 3 単位・必修、担当教員各クラス 1 名

& 12 年度後期開始時の 1 ヶ月間、6 クラス (週に 12 クラス)

\$ 実働約 100 時間

% 各クラス 40-42 名

# コミュニケーション(1F class)補助, 3 単位・必修、実施 30 コマ、休講 0 コマ

& 13 年度前期

\$ 実働約 90 時間

% 登録学生数 40 名、平均的出席者数 30 名 (概算)、単位認定は担当教員(ワイントラウブ教授)

# コミュニケーション IV, 3 単位・必修、実施 30 コマ、面談および授業評価で追加 3 コマ、休講 0 コマ

& 13 年度後期

\$ 実働約 120 時間

% 登録学生数 41 名、平均的出席者数約 30 名、単位認定者数 31 名。

# コミュニケーション I-1(1 年 GH クラス), 1.5 単位・必修、実施 15 コマ、休講 0 コマ

& 14 年度前期:

\$ 実働約 30 時間

% 登録学生数各クラス 42 名、平均的出席者数約 37 名、単位認定数 41 名。

# コミュニケーション I-1(1 年 KL クラス), 1.5 単位・必修、実施 15 コマ、休講 0 コマ

& 14 年度前期

\$ 実働約 30 時間

% 登録学生数 41 名、平均的出席者数各 32 名、単位認定数 38 名。

# コミュニケーション III、 3 単位・必修、実施 30 コマ、休講 0 コマ

& 14 年度前期

\$ 実働約 100 時間

% 登録学生数 42 名、平均的出席者数 35 名、はじめは 42 名、終わりも 42 名、単位認定者数 42

名。

# コミュニケーション III 及び IV 再履修生の指導、3 単位・必修

& 14 年度後期

\$ 実働約 30 時間、登録学生数 11 名、単位認定者数 4 名

# コミュニケーション II-1(1 年 GH クラス) 1.5 単位・必修、実施 13 コマ、休講 2 コマ

& 14 年度後期

\$ 実働約 35 時間

% 登録学生数 42 名、平均的出席者数 38 名、単位認定者数 38 名。

# コミュニケーション II-1(1 年 KL クラス) 1.5 単位・必修、実施 13 コマ、休講 2 コマ

& 14 年度後期

\$ 実働約 35 時間

% 登録学生数各クラス 41 名、平均的出席者数各クラス 34 名、単位認定者数 36 名。

# コミュニケーション IV 3 単位・必修、実施 30 コマ、休講 0 コマ

& 14 年度後期

\$ 実働約 100 時間

% 登録学生数 42 名、平均的出席者数 35 名、単位認定者数 41 名。

# コミュニケーション III 及び IV 再履修学生対象の指導、3 単位・必修

& 14 年度後期

\$ 実働約 6 時間

% 登録学生数 3 名、単位認定者数 0 名

# コミュニケーション I-1 (1 年 EF クラス) 1.5 単位・必修、実施 14 コマ、休講 1 コマ

& 15 年度前期

\$ 実働約 30 時間

% 登録学生数 42 名、平均的出席者数 35 名、単位認定者数 40 名。

# コミュニケーション I-1 (1 年 KL クラス) 1.5 単位・必修、実施 14 コマ、休講 1 コマ

& 15 年度前期

% 実働約 30 時間

% 登録学生数 43 名、平均的出席者数各クラス 35 名、単位認定者数 43 名。

# コミュニケーション III 3 単位・必修、実施 30 コマ、休講 0 コマ

& 平成 15 年度前期

\$ 実働約 70 時間

% 登録学生数 42 名、平均的出席者数約 32 名、単位認定者数 39 名。

# コミュニケーション III 及び IV 再履修学生対象の指導、3 単位・必修

& 15 年度前期

\$ 実働約 10 時間

% 登録学生数 8 名、単位認定者数 4 名

# コミュニケーション I, II, III 及び IV 再履修学生対象の指導、3 単位・必修

& 平成 15 年度後期

\$ 実働約 4 時間

% 登録学生数 3 名、単位認定者数 0 名

# 卒業論文研究指導

& 15 年度前期・後期

\$ 実働約 120 時間

% 登録学生数 2 名、単位認定者数 2 名

# プロジェクト学習、担当教員数 4

& 15 年度前期・後期

# システム情報科学概論：第 3 部実践支援教員の 1 人、担当教員数：全日本人教員

& 15 年度前期の 3 回

\$ 実働約 6 時間

# コミュニケーション II-1 (1 年 EF クラス) 1.5 単位・必修、実施 14 コマ、休講 1 コマ、

& 15 年度後期

\$ 実働約 35 時間

% 登録学生数 42 名、平均的出席者数 35 名、単位認定者数 40 名。

# コミュニケーション II-1 (1 年 KL クラス) 1.5 単位・必修、実施 14 コマ、休講 1 コマ

& 15 年度後期

\$ 実働約 35 時間

% 登録学生数 43 名、平均的出席者数各クラス 32 名、単位認定者数 36 名。

# コミュニケーションⅣ、3単位・必修、実施29コマ、休講1コマ

& 15年度後期

\$ 実働約70時間

% 登録学生数40名、平均的出席者数各クラス32名、単位認定者数38名

# コミュニケーションⅠ-1 (週2コマ) 1.5単位×2・必修、実施28コマ、休講2コマ

& 16年度前期

\$ 実働約35時間

% teachingは全クラス担当。成績集計はEF, KL分を担当。登録学生数(EFKL分)86名、平均的出席者数70名、単位認定者数81名。

# コミュニケーションⅢ、3単位・必修、実施29コマ、休講1コマ

& 16年度前期

\$ 実働約40時間

% 登録学生数42名、平均的出席者数各クラス35名、単位認定者数39名

# コミュニケーションⅡ-1(週2コマ) 1.5単位×2・必修、実施28コマ、休講2コマ

& 16年度後期

\$ 実働約35時間

% 授業は全クラス担当。成績集計作業はEF, KL分を担当。登録学生数(EFKL分)86名、平均的出席者数70名、単位認定者数84名。

# コミュニケーションⅣ、3単位・必修、実施29コマ、休講1コマ

& 16年度後期

\$ 実働約70時間

% 登録学生数46名、平均的出席者数各クラス35名、単位認定者数43名

# 卒業論文研究指導

& 16年度前期・後期

\$ 実働約120時間

% 登録学生数2名、単位認定者数1名

# プロジェクト学習

& 16年度前期・後期

\$ 実働約70時間

% 登録学生数 12 名、平均的出席者数各クラス 12 名、単位認定者数 12 名

# コミュニケーション I-1 (週 2 コマ) 1.5 単位、週 2 回・必修、実施 28 コマ、新学期オリエンテーションのための休講 2 コマ

& 17 年度前期

\$ 実働約 35 時間

% 授業は全 6 クラス担当(3 名の教員でローテーション)。成績集計は EF, KL 分を担当。登録学生数 (EFKL 分) 89 名、平均的出席者数 84 名、単位認定者数 86 名。

# コミュニケーション III、3 単位・必修、実施 30 コマ、休講 0 コマ

& 17 年度前期

\$ 実働約 40 時間

% 登録学生数 41 名、平均的出席者数各クラス 35 名、単位認定者数 41 名

# コミュニケーション II-1(週 2 コマ) 1.5 単位、週 2 回・必修、実施 30 コマ、休講 0 コマ

& 17 年度後期

\$ 実働約 35 時間

% 授業は全 6 クラス担当(3 名の教員でローテーション)。成績集計は EF, KL 分を担当。登録学生数 (EFKL 分)  $45(\text{EF})+47(\text{KL})=92$  名、平均的出席者数各クラス 42 名、単位認定者数 85 名

# コミュニケーション IV、3 単位・必修、実施 29 コマ、休講 0 コマ

& 17 年度後期

\$ 実働約 70 時間

% 登録学生数 42 名、平均的出席者数各クラス 35 名、単位認定者数 38 名

# 卒業論文研究指導 (卒業研究のための言語運用ゼミ(4 研究室合同ゼミ)の実施)

& 17 年度前期・後期

\$ 実働約 120 時間

% 登録学生数 4 名、単位認定者数 4 名。(合同ゼミ受講者は 20 名)。

# プロジェクト学習

& 17 年度前期・後期

\$ 実働約 60 時間

% 登録学生数 15 名、平均的出席者数各クラス 15 名、単位認定者数 15 名

# コミュニケーション I-1 1.5 単位、週 2 回・必修、実施 28 コマ、新学期オリエンテーションのための休講 1 コマ

& 18 年度前期

\$ 実働約 40 時間

% 全 6 クラス担当(3 名の教員でローテーション)。登録学生数 254 名、平均的出席者数 各クラス 42 名、単位認定者数 241 名。

# コミュニケーション III 、週 2 回、3 単位・必修、実施 29 コマ、休講 1 コマ

& 18 年度前期

\$ 実働約 40 時間

% 登録学生数 41 名、平均的出席者数各クラス 38 名、単位認定者数 41 名

# コミュニケーション II-1 1.5 単位、週 2 回・必修、実施 30 コマ、休講 0 コマ

& 18 年度後期

\$ 実働約 40 時間

% 全クラス担当(3 名の教員でローテーション)。登録学生数 255 名、平均的出席者数各クラス 42 名、単位認定者数 239 名。

# 日本語初級 (HGKZ からの留学生対象)、留学生の希望による開講、実施 22 回(各回 60~120 分)

& 18 年度前期

\$ 実働約 40 時間

% 対象留学生 1 名

# 卒業論文研究指導 (卒業研究のための言語運用ゼミ(4 研究室合同のゼミ)の実施)

& 18 年度前期・後期

\$ 実働約 120 時間

% 登録学生数 4 名、単位認定者数 4 名。(合同ゼミ受講者は 20 名)。

# プロジェクト学習

& 18 年度前期・後期

\$ 実働約 60 時間

% 登録学生数 15 名、平均的出席者数各クラス 15 名、単位認定者数 15 名

# 日本語初級 (ユトレヒト大学からの留学生対象)、留学生の希望による開講、実施 11 コマ (各回 90 分)

& 18 年度後期

\$ 実働約 40 時間

% 対象留学生 2 名

2) 成績評価方法 (その方法を具体的に記載・学生 (社会) が納得するような具体的説明。) また、複数の教員で担当する科目の場合は、取りまとめの方法についても記述してください。

- 13 年度前期までは成績評価に関与しなかったので省略
- 評価基準は各学期の初回に syllabus を配布し学生に提示している。(講義ページでも参照可能である)。
- 13 年後期コミュニケーション IV :
  - ◇ 出席・参加率 30% (1 回の full 参加で 1point×30 回=30 point. 遅刻は 3 回で欠席 1 扱い)、宿題・提出物 25% (25 の宿題、各 1point. late は half point. Incomplete は再提出により half point)、最終レポート 10% (project のリフレクション)、FUN-ETSU BBS Communication Project15% (投稿数と内容と面談にて評価)、FUN Places -2B Style – Project (バイリンガルウェブページの作成) 20% (作品とプレゼンテーションと面談で評価)
  - ◇ なお、学生から回収した提出物には何らかのフィードバックをかけている。
- 14 年度前期 :
  - コミュニケーション I-1 : 以下の項目について総合的に評価。1. リスニング演習(小テスト) [30%], 2. 英語構成法演習(各 Unit 課題及びテスト) [40%], 3. 期末試験 (英語構成法演習のセクションで扱った内容の理解と応用) [30%]。  
なお、学生から回収した提出物には必ず、何らかのフィードバックをかけている。エッセイは添削し、コメントを加えている。横山クラス・松原(知)クラスの評価基準は、統一して行った。
  - コミュニケーション III(コース 1 日目にアナウンス済み) : 以下の項目について評価。  
1. 出席・参加率 30% (1 回の full 参加で 1point×30 回=30 point. 遅刻は 3 回で欠席 1 扱い)、宿題・提出物 25% (提出遅れは half point. Incomplete は受け付けず再提出により half point)、最終レポート 10% (project のリフレクション)、FUN-ETSU BBS Communication Project(テネシーの大学生との BBS での communication)25%、Service Learning Mini-Project (外国人と助け合うプロジェクト) 10%。(Open ended activities については、作品、活動頻度、内容、リフレクション記録、プレゼンテーションと面談で評価)、ポートフォリオ : ボーナスポイント

➤ なお、学生から回収した提出物には何らかのフィードバックをかけている。

● 14 年度後期

➤ コミュニケーション II-1： 以下の項目について総合的に評価する。1. リスニング演習(小テスト) [30%], 2.英語構成法演習(実用課題,Unit まとめテスト)[40%], 3. 期末試験 [20%] (1年間のまとめ/Listening は含まない) 4. Reading Assignment [10%]

☆ 横山クラス・松原(知)クラスの評価基準は、統一して行なった。

➤ コミュニケーション IV： 以下の項目について評価。1. 出席・参加率 30% (1回の full 参加で 1point×30 回=30 point. 遅刻は 3 回で欠席 1 扱い)、宿題・提出物 20% (提出遅れは half point。Incomplete は point とせず再提出により half point)、最終レポート 20% (project の reflection)、FUN-ETSU BBS Communication Project15%、Mini-Project (バイリンガルウェブページの作成) 15%。 (Open ended activities については、作品、活動頻度、内容、リフレクション記録、プレゼンと面談で評価)、ポートフォリオ 5%

➤ なお、学生から回収した提出物には何らかのフィードバックをかけている。

● 15 年度前期

➤ コミュニケーション I-1: 以下の項目について評価する。1)リスニング演習/小テスト [30%] 2)英語構成法演習/各 Unit 課題及びテスト [40%] 3)期末試験 (英語構成法演習 (introduction 含む)のセクションで扱った内容の理解と応用) [30%]

➤ コミュニケーション III: 以下の項目について評価する。出席・参加率 30% (1回の full 参加で 1point×30 回=30 point. 遅刻は 3 回で欠席 1 扱い)、宿題・提出物 20% (提出遅れは当日中は 20%の減点、それ以降は half point。Incomplete は point とせず再提出により half point)、最終レポート 20% (project 等の summary, reflection を題材にした paper)、FUN-ETSU BBS Communication Project(テネシーの大学生との BBS での communication)10%、Mini-Project (バイリンガルウェブページの作成) 15%。 (Open ended activities については、作品、活動頻度、内容、リフレクション記録、プレゼンテーションと面談で評価)、ポートフォリオ 5%

➤ なお、学生から回収した提出物には何らかのフィードバックをかけている。

● 15 年度後期

➤ コミュニケーション II-1: 以下の項目について評価する。1)リスニング演習の小テスト [30%], 2) エッセイ課題、プレゼンテーション資料、Unit テスト 50%, 3) Final Exam [20%]

➤ コミュニケーション IV: 以下の項目について評価する。出席・参加率 30% (1回の full 参加で 1point×30 回=30 point. 遅刻は 3 回で欠席 1 扱い)、宿題・提出物 20% (提出遅れは当日中は 20%の減点、それ以降は half point。Incomplete は point とせず再提出によ

り half point)、最終レポート 20% (project 等の summary, reflection を題材にした paper)、FUN-ETSU BBS Communication Project(テネシーの大学生との BBS での communication)15%、Mini-Project (バイリンガルウェブページの作成) 15%。 (Open ended activities については、作品、活動頻度、内容、リフレクション記録、プレゼンテーションと面談で評価)、ポートフォリオ 5%  
なお、学生から回収した提出物には何らかのフィードバックをかけている。

● 16 年度前期

- Communication I-1: Strategies: attendance pass/fail, first essay 50%, final essay with other related materials 50%.
- Communication III: Project: attendance pass/fail, mikibbs 30 %, Homework assignment 25%, Final report 25%, Communication with mikibbs 25%, Mini-Project 25%

● 16 年度後期

- Communication II-1: Strategies: attendance pass/fail, first essay 50%, final essay with other related materials 50%.
- Communication IV: Project: attendance pass/fail, mikibbs 30 %, Homework assignment 10%, Final report 30%, Mini-Project 30%

● 17 年度前期

- Communication I-1: Strategies: attendance pass/fail, Homework Assignments 50%, Final Product submission (Final essay and other related materials) 50%
- Communication III: Project: attendance pass/fail, mikibbs 30 %, Mini-Project 30%, Individual portfolios/journals 10%, Final Report and other homework assignments 30%
- 卒研合同ゼミ: 課題をこなすことで可。
- プロジェクト学習: プロジェクト学習の評価方法による。

● 17 年度後期

- Communication II-1: Strategies: attendance pass/fail, Paper (draft) 15% , Peer review 15%, Reflective activities 15%, English use in class 15% , Final paper 40%
- Communication IV: Project: attendance pass/fail, Communication with mikibbs and the other related work 40%, Mini-Project and the related work 50%, Other Assignments 10%
- 卒研合同ゼミ: 課題をこなすことで言語運用ゼミとしては合。
- プロジェクト学習: プロジェクト学習の評価方法による。

● 18 年度前期

- Communication I-1: Strategies: attendance pass/fail, paper draft 20%, peer review activities 20%, reflective activities 20%, Final paper 40%
  - Communication III: Project: attendance pass/fail, Mini-Project and the related work 80%, other assignments 20%
  - 卒研合同ゼミ：課題をこなしているかどうかで判定。
  - プロジェクト学習：プロジェクト学習の評価方法による。
  - 日本語初級：正式科目ではないため、学習・教授記録の保管のみ。
- 18年度後期
    - Communication II-1: Strategies: attendance pass/fail, Paper (draft) 10% , Peer review 10%, Reflective activities 10%, Final paper 70%
    - 卒研合同ゼミ：課題をこなしているかどうかで判定。
    - プロジェクト学習：プロジェクト学習の評価方法による。
    - 日本語初級：正式科目ではないため、学習・教授記録の保管のみ。

3) 講義方法など改善への努力 (FD 関連の講演会などの聴講回数、教育内容とそれらの効果について貴方が行われた事柄・目標を具体的に記述して下さい)。

- FD 関連講演会等聴講回数:12年度学内3回、13年度学内3回学外2回 (函館大・教育大)
- 教育内容とそれらの効果：
 

以下のような方法で、教育方法改善を行い続けている。

  1. 学生の英語書き作業への態度の調査、コミュニケーション学習への動向把握、BBS 上での英語使用の分析を行い、次学期以降の教育の参考にした。(2001年～2005年)
  2. 英語での bbs 実践研究(2001-2003)の成果をその後の実践に還元中である(2003～)。
  3. 科学論文を読み書きするための基礎の教育が必要であるという教員の意見を踏まえ、ライティングストラテジーの教育を導入し、その後も継続している。(2002年～)
  4. 15年度後期までのコミュニケーション III/IV では出席点を与えていたが、学生との面談や、学生の受講態度、受講後の outcomes、また、今後の JABEE 対応講義とするための準備などから総合的に判断し、16年度からは出席点を廃止し、出席は pass/fail system とした。
  5. 下記のような方法を用いて、学期中に学生からの声を取り込みながら授業の振り返りや授業改善をすすめている。
    1. 学期中の学生からのフィードバックの吸収 (学内クラス用 public folder (平成 13 年まで) ,メーリングリスト(e-groups)によるアンケート(2002年)、用紙によるアン

ケート(2001-2003 年)、CSS(授業支援システム) を利用したオンラインアンケート (2002～現在) 、学生との面談等)

6. 上記のフィードバック等によるデータ整理後の教育改善例として以下のようなものがある。

1. コミュニケーション I/II

- ① 40 人クラスでの個別の学生への対応や英文添削機能を授業に取り入れるための工夫(peer evaluation, peer evaluation における学びのグループでの共有) (14 年度→18 年度)
- ② 平成 14 年度の Communication I, II (ストラテジーコース)は、3 名の教員がそれぞれ別のクラスを担当し、運営したが、クラス間で学びの種類に違いが生じることから、平成 15 年度からは、上記の 3 名のストラテジー教員のローテーションによる教育を実現した。これにより、どのクラスの学生も 3 人の教員から同じ内容を受けられるようになり、成績・評価の面においても公平さが増したといえる(現在も継続中)。
- ③ 平成 17 年度は、その 3 名の教員間での授業内容の確認、学習項目の関連付けなど、連携強化に取り組んだ。その結果は 18 年度の実践に反映させている。その結果、19 年度からは 3 名の教員がそれぞれのセクションを教え、最終課題を共通で 1 つ出させるという方式に改善した。学生の課題への負担を減らしつつ効果をあげる工夫を試みている。

2. コミュニケーション III/IV

- ① 英語による授業について来られない学生へ対応するための教育方法改善
  - 14 年度は英語で授業をすすめたが、14 年度前期・後期のコース分析および学生からフィードバックを踏まえ、15 年度から以下のように方法を変更し、効果を得ている。はじめの 1 ヶ月は日本語の使用も許可し、その中で英語が分からないときの聞き返しのストラテジーなどを指導。授業開始 1 ヶ月後、個別に面談をし、残っている疑問点、不安点に対応し、その後から英語のみで授業をすすめた。
  - 19 年度は、試行的に口頭によるインストラクションにのみ日本語を用いている。ただし学習資料や課題等に関する配布資料は、英語である。口頭によるインストラクションを日本語にすることで、英語力の細かい部分(適切な文法や語彙の選択など)の能力が向上することを想定している。英語のリスニング力対策には、同じ学生が受講する他の教員のコミュニケーションクラスで取り入れられるように調整した。
- ② コミュニケーションクラス内プロジェクトの過程で既習の事項やストラテジーを意識的に使わせるための教育方法改善

- ターゲットとなるスキルやストラテジーが必要になる時期に **tips** として紹介し、また、そのタイミングについては毎学期検討を重ねているところである。(13年度 - 18年度)

### 3. プロジェクト学習指導および卒業研究指導における指導内容とコミュニケーションクラス運営

- プロジェクト学習中や卒業研究活動中に3年生・4年生がコミュニケーション力関連でつまづきがちだったところを1・2年生対象のコミュニケーションクラス運営の参考にしている。例えば、コミュニケーションクラス内で、以下のような項目を3年次以降の例を混ぜながら従来よりも詳しく教えるよう、教育内容の改善をしてきているところである。

17年度までは以下の改善を行った。

- 英文パラグラフの書き方、概要の書き方(構成)(コミュニケーション I)
- グラフや図を複数の英文パラグラフで説明する方法(コミュニケーション II)
- プレゼンテーションの時に気をつけること(コミュニケーション III/IV)
- プレゼンテーションの構成(コミュニケーション III/IV)
- バイリンガル資料の作成(コミュニケーション III/IV)
- 立場や **audience** 等の違いによって使用言語やプレゼンテーションのスタイルを変えるための注意点(コミュニケーション II)

今までも取り入れている内容ではあるが、学生は、数年後に必ず必要になるスキルであることを例とともに具体的に知ることにより、より動機付けられるようになってきていると思われる。

18年度以降、さらに以下の項目について導入や、教え方の改善を行っている

- 研究領域の決め方、説明の仕方 (Niche) (コミュニケーション III/IV)
- 参考文献の探し方、引用の仕方(コミュニケーション III/IV)
- レポートの文体(コミュニケーション III/IV)
- 質問をする重要性と意義, タイミングのとり方(コミュニケーション III/IV)
- 挨拶をすること(コミュニケーション I/II)
- 分からない時には反応をすること(コミュニケーション全クラス)
- メールの書き方(**subject** を書く、本文 1 行目に誰宛か書く、自分の名前を本文内に書く、返事を書く、など) (コミュニケーション I/II)
- 質問や問い合わせは、誰にどう聞くのが適切か、一度考え、その後積極的に行動すること(コミュニケーション I/II)
- 誰かが欠席した場合など、不足の事態が起きた時もプロジェクトをすす

められるよう、対策をとっておくこと(コミュニケーション III/IV)

- ただしこれらの改善は、英語によるコミュニケーションクラス内でのものであり、気づきを与えたり概念を踏まえさせるところまでは到達できているが、日本語で行われるプロジェクト学習や卒業研究活動への即戦力を養うまでには至っていない。上記に関連した日本語力の育成は、担当している17年度からプロジェクト学習や17年度からの卒業研究指導(合同ゼミ)で実施している。19年度のコミュニケーションクラスからは、日本語でインストラクションをすることになったため、上記の項目をより導入できるようになっている。

7. 18年度より、本学への留学生を対象に日本語学習支援(日本語初級クラス)を実施している。日本語を学んでいる留学生と日本人学生が交流することで自分たちの日本語の使い方をより意識するようになってきた日本人学生も現れている。

4) その他(上記以外に特記すべきことがありましたら、簡潔かつ具体的に、箇条書きなどで記述してください。特に、貴方が作られたシラバスと現在教務委員会で検討されている(コース別)講義内容・目標、あるいは JABEE などとの関連、並びに貴方が担当されている科目の位置付けなどについてご意見があれば記して下さい。また、本学は教員の専門分野が多岐にわたっているため、相互理解を目的としたコース特有の問題点や、皆さんの教育に対する抱負などを記述して戴いても結構です。)

### 3 大学の管理運営

各種委員会(委員長・委員、クラス担任、学習指導・生活指導、クラブ活動の顧問等の実績(具体的に記述してください、できれば実働延べ時間数など))、その他。(平成12-18年度に限る)

- 平成12-13年度 公開講座委員会委員
- 平成12-14年度 オープンキャンパス実行委員会委員
- 平成12-14年度 コミュニケーションセンター委員
- 平成13年度 未来祭顧問
- 平成15年度後期 情報ライブラリー委員会委員

- 平成 16-17 年度 人権・実験倫理委員会委員
- 平成 16- 17 年度 セクシャルハラスメント防止等委員会委員
- 平成 16- 17 年度 セクシャルハラスメント防止等委員会相談員
- 平成 16-17 年度 書道部顧問
- 平成 17 年度後期 CML ワーキンググループ委員
- 平成 18 年度ー オープンキャンパスワーキンググループ委員
- 平成 18 年度ー 国内国際連携委員会(KKR) 前期委員 後期副委員長
- 平成 18 年度ー セクシャルハラスメント防止等委員会相談員

その他、入試関係の業務

#### 4 その他

資格（技術士など）、地域への貢献（地域自治体審議会、委員会等の役員、委員。地域との共同研究・技術相談。公開講座・出前授業・市民向け講演）あるいは提言・御意見など。（平成 12-18 年度に限る）

- 平成 13 年度 - 17 年度：英語検定道南地区面接委員（3 級、準 2 級および 2 級。年に 2～3 回）
- 平成 13 年度ー15 年度, 17 年度：北海道国際交流センター日本語日本文化プログラムの留学生と未来大学生との交流の橋渡し
- 平成 14 年度- 15 年度：函館地区中学生英語暗誦大会審査員(年に 1 回)
- 平成 14 年度ー16 年度：アメリカ東テネシー州立大学との共同研究を通し、アメリカのテネシー州にて未来大の紹介
- 平成 14 年度ー：北海道教育大学教育学部函館校非常勤講師
  - 日本語(2002 年～)、英語科教育法演習 II (2003 年～2006 年)、日本語教育概論（2006 年後期～）、日本語・日本文化ゼミナール（2006 年後期～）
- 平成 18 年度：第 57 回高円宮杯全日本中学校弁論大会 第 17 回道南大会審査員(1 回)
- 平成 18 年度ー：函館ハリファックス協会理事